

詩篇35-37篇「倒れる悪者」

1A 悪に対する報い 35

1B 謂われのない争い 1-10

2B 善に悪で報いる中傷 11-18

3B 災いへの喜び 19-28

2A 礼拝によって 36

1B 腐った心 1-4

2B 恵みの尊さ 5-9

3B 悪への勝利 10-12

3A 地を受け継ぐ者 37

1B 悪に耐え忍び、待つ者 1-11

2B なくなる敵対者 12-20

3B 人に施す者 21-29

4B 主の道を守る者 30-40

本文

詩篇 35 篇を開いてください。私たちが今日読んでいく、35 篇から 37 篇に題名を付けますと、「倒れる悪者」になります。私たちがこの世に生きていて、見えてくる耐えきれない不正や悪、不条理があります。そして神とキリストを信じているからこそ生じてくる葛藤があります。それらに対して、私たちが悪をもって仕返しするのではなく、喜びと賛美をもって応答できるのだというのがこの三つの詩篇の内容です。35 篇では「祈り」によって、36 篇では「礼拝」によって、そして 37 篇では「忍耐して善を行なう」ことによって克服できることを学んでいきます。

1A 悪に対する報い 35

1B 謂われのない争い 1-10

35 ダビデによる 35:1 主よ。私と争う者と争い、私と戦う者と戦ってください。35:2 盾と大盾とを手にとって、私を助けに、立ち上がってください。35:3 槍を抜き、私に追い迫る者を封じてください。私のたましいに言ってください。「わたしがあなたの救いだ。」と。

おそらく、再びサウルに追われている時の祈りを読んでいるのだと思われます。ダビデはサウルの忠実な家臣でした。そして義父でもありました。けれども、ダビデがサウルに危害を与えるという謂れのない中傷によって、サウルに命を狙われる身となりました。ダビデは決して、罪なき者ではありません。けれども、神に愛され、神によって正しいとみなされた者でした。それは、彼が神に拠り頼んだからでした。自分は神なしには何もない貧しき者であり、この方に信頼しているからこそ生きていけることを知っていました。これは、新約聖書で「信仰による義」と呼ばれます。律法の行

ないではなく、キリストを信じる信仰によって義とみなされます。

そのような者に対して、神は決して罪と定めることはなさいません。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ 8:1)」ですから、神はキリストにある者の味方であられるのです。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(8:31)」しかし、執拗に罪に定めようとする霊的勢力があります。悪魔とその手下どもが、キリストによって流された血潮ではなく、私たち自身の内に義がないではないかと責め立てる告発をします。あらゆる形で、それを執拗に、巧妙に行います。ですからダビデの祈りは、私たちの祈りでもあるのです。「私と争う者と争い、私と戦う者と戦ってください」という祈りです。

35:4 私のいのちを求める者どもが恥を見、卑しめられますように。私のわざわいを図る者が退き、はずかしめを受けますように。35:5 彼らを風の前のもみがらのようにし、主の使いに押しのかせてください。35:6 彼らの道をやみとし、また、すべるようにし、主の使いに彼らを追わせてください。

ダビデは今、出エジプトにおける主の使いの働きを思い起こし、それを自分に対しても行なっていきたいと神に願っています。イスラエルが紅海のほとりで宿営している時に、パロが精鋭部隊を連れて彼らを襲いました。モーセが主に祈り、紅海が分かれました。その乾いたところをイスラエルの民は歩きましたが、エジプトの軍隊も追ってきました。けれども、主の使いがその間に入って攪乱したのです。「ついでイスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移って、彼らのあとを進んだ。それで、雲の柱は彼らの前から移って、彼らのうしろに立ち、エジプトの陣営とイスラエルの陣営との間にはいった。それは真暗な雲であったので、夜を迷い込ませ、一晩中、一方が他方に近づくことはなかった。(出エジプト 14:19-20)」

主の使いは、ヨシュアがカナン人と戦っている時にも戦ってくださいました。そして、ゼカリヤ書を見ますと、バビロン捕囚後の帰還の代表である、祭司ヨシュアを主の前で責めているサタンがおり、その告発に対して弁護しているのが主の使いです。そして、ヨシュアの汚れた着物を聖なる祭司の装束に着替えさせました(3章)。このように弁護するために戦うのが、主の使いの働きですが、多くの聖書学者がこの方は三位一体の第二格、イエス・キリストであろうということです。受肉前のキリストの姿であります。キリストは、私たちを弁護するための義なる方です。

35:7 まことに、彼らはゆえもなく、私にひそかに網を張り、ゆえもなく、私のたましいを陥れようと、穴を掘りました。35:8 思わぬときに、滅びが彼を襲いますように。ひそかに張ったおのれの網が彼を捕え、滅びの中に彼が落ち込みますように。

二度繰り返しています、「ゆえもなく」という言葉です。ダビデ側に、主君から命を狙われるようなことは何一つ原因がない、ということです。私は以前、自分のホームページの掲示板でユダヤ人

が歴史で謂れのない迫害を受けてきたと言ったら、ある者が「そのことについては意見を保留します。」と言いました。なぜか？ユダヤ人が迫害されるのは、彼らにも原因があるということを言いたかったからです。私は恐ろしくなりました。もちろん、ユダヤ人には罪があります。しかし、その仕打ちを受けているのは、直接に彼らの罪に拠るものではありません。

人間は、誰もこのような論理を持っています。何か災いが起これば、その人にその災いを受ける原因があるというものです。生まれつきの盲目を見て、弟子たちは彼が盲目に生まれついたのは、本人の罪によるものか、それとも両親の罪によるものか聞きました。イエス様はどちらも否定されました。そして、神のわざがこの人に現われるために、このように神がなされたことを話されました。神は人を盲目にもします。しかし、それはご自分の良い目的のためにそうするのであり、彼の罪のせいではないのです。

35:9 こうして私のたましいは、主にあつて喜び、御救いの中にあつて楽しむことでしょう。35:10 私のすべての骨は言いましょ。「主よ。だれか、あなたのような方がいるでしょうか。悩む者を、彼よりも強い者から救い出す方。そうです。悩む者、貧しい者を、奪い取る者から。」

ダビデは、サウルに追われているその時に、このように主の救いを喜び賛美するだろうと確信をもって話しています。これを、三度繰り返します。敵が呪われることを祈り、その後には賛美します。この後、18節で賛美して、そして28節でも賛美しています。

なぜ賛美できるようになったのか？祈ったからです。そして、具体的に敵に対して、その敵が自分のしていることに従って呪われるように祈ったからです。ここからとても大切なことですが、イエス様は敵の祝福のために祈りなさいと命じられました。一見矛盾することですが、実はダビデはこのことをすることができるように、むしろ復讐を神にゆだねたのです。神は人を赦す方ですが、罪に対して罰しないことは決してなさらない方です。もし罰しないのであれば、十字架は必要なかったでしょう。悪に対して悪で報いる方なのです。

しかし、それを行なうのは自分ではなく、神なのです。ここが大事です。自分もその敵と同じように罪ある者です。唯一正しい方、神こそがその者に復讐することができます。ですから、このような祈りを捧げることによって、かえって敵を憐れみ、敵に善を行ない、敵のために祈れるようになるのです。自分を迫害する者たちが、その迫害によって神に怠りない裁きを受けるのですから、憐れんでくださるよう祈る余裕が与えられます。ですから、サウルについてはこれだけ激しい呪いの祈りを捧げたのに、いや捧げたからこそ、ダビデはサウルの死を悼み悲しむことができ、サウルを殺したと言ってきたアマレク人のかえって死刑に処することをしました。

2B 善に悪で報いる中傷 11-18

35:11 暴虐な証人どもが立ち私の知らないことを私に問う。35:12 彼らは善にかえて悪を報い、

私のたましいは見捨てられる。35:13 しかし、私は・・、彼らの病のとき、私の着物は荒布だった。私は断食してたましいを悩ませ、私の祈りは私の胸を行き来していた。35:14 私の友、私の兄弟にするように、私は歩き回り、母の喪に服するように、私はうなだれて泣き悲しんだ。35:15 だが、彼らは私がつまずくと喜び、相つどい、私の知らない攻撃者どもが、共に私を目ざして集まり、休みなく私を中傷した。35:16 私の回りの、あざけり、ののしる者どもは私に向かって歯ざしりした。

ダビデは、善に対して悪で報いられることの痛みを主に申し上げています。サウルやその周りの者たちに対して、ダビデは心を使って憐れんでいました。イエス様は、「憐れむ者は幸いです。」と言われましたが、ただかわいそうと思うことは同情かもしれませんが憐れみではありません。憐れみとは、ここでダビデがしているように、共に痛み苦しみ、悩むことです。簡単に解答を与えないことです。結論だけでなく、その過程とも共にいることです。

ところが、それを行っていった人々から激しい中傷を受けています。事実、これは起こります。愛を注ぐとそれだけ、反発として帰ってくる場合があります。しかし、それがかえって愛の性質だと言えるかもしれません。私たちの主ご自身が、そうでした。「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。(ヨハネ 1:11)」

35:17 わが主よ。いつまでながめておられるのですか。どうか私のたましいを彼らの略奪から、私のただ一つのを若い獅子から、奪い返してください。35:18 私は大きな会衆の中で、あなたに感謝し、強い人々の間で、あなたを賛美します。

ダビデは、再び神を賛美する意志を示しています。ここでは、「強い人々の間で」と言っています。サウルたちのような人々のことです。獅子のように魂を奪い取ろうとしている人々のことです。どんな強い人がいようと、その強い者たちも神の主権の中でひれ伏さなければいけません。

3B 災いへの喜び 19-28

35:19 偽り者の、私の敵を、私のことで喜ばせないでください。ゆえもなく私を憎む人々が目くばせしないようにしてください。35:20 彼らは平和を語らず、地の平穏な人々に、欺きごとをたくらむからです。35:21 彼らは私に向かって、大きく口を開き、「あはは、あはは。この目を見たぞ。」と言います。35:22 主よ。あなたはそれをご覧になったのです。黙っていないでください。わが主よ。私から遠く離れないでください。

中傷する者たちの目的は、その人が倒れるのを見て喜ぶことです。「あはは、あはは。この目を見たぞ。」と、自分の憎む者を「ざまあ見ろ！」と喜ぶことです。「目くばせ」というのは、分かり易く言えば陰湿ないじめをしている時の姿です。相手が酷い仕打ちを受けていますが、周囲の人々は関心を持たなければそのことに気づきません。

35:23 奮い立ってください。目をさましてください。私のさばきのために。わが神、わが主よ。私の訴えのために。35:24 あなたの義にしたがって、私を弁護してください。わが神、主よ。彼らを私のことで喜ばせないでください。35:25 彼らに心のうちで言わせないでください。「あはは。われわれの望みどおりだ。」と。また、言わせないでください。「われわれは彼を、のみこんだ。」と。35:26 私のわざわいを楽しんでいる者らは、みな恥を見、はずかしめを受けますように。私に向かって高ぶる者は、恥と侮辱をこうむりますように。

災いを楽しむ者たち、これを神は忌み嫌われます。コリント第一 13 章 5 節に、愛が「人のした悪を思わず」とあります。これは訳によっては、人にふりかかった災いを思わず、ということも言えます。主は人がご自分に立ちあがり、生きることを願われています。人の倒れるのを喜ぶことは、神の御心ではありません。主はヨナに対して、このことを強く示されました。ニネベの者たちが滅びることを彼は心から願いましたが、主は彼らを憐れむことによって、彼の願いを憎まれたのです。箴言にこう書いてあります。「あなたの敵が倒れるとき、喜んではならない。彼がつまずくとき、あなたは心から楽しんではいけません。主がそれを見て、御心を痛み、彼への怒りをやめられるといけなから。(24:17-18)」

35:27 私の義を喜びとする者は、喜びの声をあげ、楽しむようにしてください。彼らにいつも言わせてください。「ご自分のしもべの繁栄を喜ばれる主は、大いなるかな。」と。35:28 私の舌はあなたの義とあなたの誉れを日夜、口ずさむことでしょう。

私たちが喜ばなければいけないのは、これです。ダビデの義というのは、主に信頼して生きることです。人のした悪について思うのではなく、主に信頼して生きる人々を見てそれを喜んで、楽しむようにすることです。妬むのではなく、むしろ神の国のゆえに喜ぶのです。そして彼は、神の誉れと義をいつまでも、口ずさむと決意しています。賛美というのは、賛美をしたいからするものではないようです。賛美をしますという決意であることが分かります。自分は神に賛美をするために造られたのだという使命を持っていることです。そのために生きているのだ、ということです。

このように祈りの中でダビデは、悪に対して戦いました。次は礼拝によって、悪に戦います。

2A 礼拝によって 36

1B 腐った心 1-4

36 指揮者のために。主のしもべ、ダビデによる

ダビデは自分のことを、「主のしもべ」と呼んでいます。主に仕える者として、この世にある悪にどう対処すればよいかを話しています。

36:1 罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。36:2 彼はお

のれの目で自分にへつらっている。おのれの咎を見つけ出し、それを憎むことで。36:3 彼の口のことばは、不法と欺きだ。彼は知恵を得ることも、善を行なうこともやめてしまっている。36:4 彼は寢床で、不法を図り、よくない道に堅く立っていて、悪を捨てようとしなない。

この箇所を見ると、ノアの時代の人々の状態を思い出します。「創世 6:5 主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」心の中が、人はどれだけ腐ってしまうかをダビデは描写しています。第一に、最も大きな問題は「神に対する恐れがない」ということです。神がいないか、神がいたとしても、神は見えていないと嘯っています。そして第二に、へつらいです。なぜなら、神という基準がないので、全て自分の目に正しいということ測りにしています。自分の目で間違っていると思っていることだけを間違いとして、自分が善悪の基準にしています。第三に、それゆえ出てくる言葉が、不法と欺きです。そして第四に、寝ている時さえ神のことを思わず、自分がすると決めたことをどのようにしようかと、対策を練っています。こんな状況の中で、主に仕える者、主の僕は何をすればよいのでしょうか？

2B 恵みの尊さ 5-9

36:5 主よ。あなたの恵みは天にあり、あなたの真実は雲にまで及びます。36:6 あなたの義は高くそびえる山のように、あなたのさばきは深い海のようにです。あなたは人や獣を榮えさせてくださいます。主よ。

ダビデは主を礼拝しました。その恵みの偉大さをほめたたえました。この恵みの単語は、「ヘセド」です。これは単なる気前の良さや好感の話をしているものではありません。神が愛してくださって、それを、契約をもって結んでくださっているということです。イエス様は、その愛をご自身の血を流すことによって、私たちと神が契約を結ぶようにしてくださいました。ですから、どんなことがあっても決して引き離されることのない愛です。これが「天」にあるといえます。つまり、限界を知らないということです。無尽蔵ということです。

そして、真実はエムナーと言って、そのまま神の真実さを表しています。主が語られたことは、一つ残らず成就します。主は約束されたことを決して反故にされません。そして、真実は「雲」にまで及んでいます。これもはるか高い所まで、けれども空の雲ですから目に見える形で実現するということです。そして義はツエデクで、神の義は山のように堅固であります。ですから神が私たちを義と認められる時は、それは揺るがぬ山で守られているようなものです。さらに裁きはミツパであり、神は人の世界の深みまでことごとく知りつくしておられます。そして主は、これらのご性質をもって人も獣も榮えさせておられるのです。

36:7 神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます。36:8 彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさいます。36:9 いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るか

らです。

恵みは二つの効果を与えてくれます。一つは、守りと安心感です。御翼の陰に身を避けることができるようにしてくれます。私たちが、行ないではなく神の恵みによって、信仰によって救われていることは、私たちがあらゆる恐れから守ってくれます。そしてもう一つの効果は、命です。神の家、すなわち神殿から流れる命の水によって、自分がその水をいっぱい飲むことができるということです。新しいエルサレムの神の都において、生ける水がその中央から流れていますね。それは光輝く水ですが、それを飲ませてくださいます。

3B 悪への勝利 10-12

このようにして、ダビデは神への礼拝によって悪から守られています。そこで悪に勝利している姿を次に描いています。

36:10 注いでください。あなたの恵みを、あなたを知る者に。あなたの義を、心の直ぐな人に。
36:11 高ぶりの足が私に追いつかず、悪者の手が私を追いやらないようにしてください。36:12
そこでは、不法を行なう者は倒れ、押し倒されて立ち上げられません。

神の恵みと、神の義によるその川には、高ぶりの足は倒れて、押し倒されて立ち上げられません。ゆえに、ダビデに追いつくことはないと言っています。面白い形容ですね。神の恵みというのは、いつも神の義によって現れています。神の義によって、私たちはその栄光に到達することはできないことを教えます。そして私たちは死んで、死後に裁きを受けなければいけない、落ちてしまった者です。けれども神が、キリストにあって私たちを引き上げてくださいました。ここに神の恵みがあります。したがって高ぶっている者は、必ず壁にぶち当たります。自分の内に善があると思っっているので、それで神の恵みの流れの中に入ることができず、むしろ倒れてしまうのです。神の義ではなく、自分の義を押し出してしまうので、倒れてしまうのです。

ところで恵みについて、「あなたを知る者に」注いでくださいと祈っています。神を知っている者が恵みに預かることができます。「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。(2ペテロ 3:18)」神の恵みは、神を親密に知る、神を人格的に知ることに関わります。そして、義については、「心の直ぐな人に」とあります。神の前で自分の心が開かれていることであります。ゆえに、自分は心貧しい者、悩む者、罪について悲しむ者であります。そのような人に、神の義の賜物が豊かに注がれます。

3A 地を受け継ぐ者 37

そして 37 篇です。私たちは悪に対して、祈ること。そして、礼拝することを見ました。そしてこの詩歌においては、「忍耐して善を行なう」ことであります。

1B 悪に耐え忍び、待つ者 1-11

37 ダビデによる 37:1 悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。37:2 彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。37:3 主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。37:4 主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。37:5 あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。37:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。37:7 主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。

午前礼拝で、ここの箇所をじっくりと取り組みました。悪に対して腹を立て、妬みを抱いてはいけないのですが、それに対抗するのは、主に信頼することです。具体的には善を行ないます。そして、主ご自身を自分の喜びとします。自分の事柄を主にゆだねます。そして、主の前に静まり、耐え忍んで主を待ちます。お話ししましたように、この「待つ」は痛みを伴いながら待ちます。

この学びをしている時に、不思議に昨日、私の友人の牧師さんが次のツイートをしていました。「【～しないと大変なことになってしまう】は、誰の声？行動の動機が恐れからだ様々な規制やルールを主張し人や自分をコントロールしようとするが、神への信頼の中で主が働いておられることに期待して行動するなら、そこには愛が生まれる。」腹を立てる、ねたむ背後には恐れがあります。それに反応すると、ちょうどサウルのように人を支配するようになります。けれども、主に信頼してそれで行おうとしているところには、愛という実を結びます。詩篇 37 篇にぴったりの内容です。

37:8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。37:9 悪を行なう者は断ち切られる。しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。37:10 ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。37:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。

この詩歌で、「地を受け継ぐ」という言葉が何度も出てきます。イスラエルの民にとって、約束のカナン人の地を受け継ぐことは、ちょうどキリスト者が神の国を受け継ぐことと同じでありました。ダビデは、その地から追い出されて、サウルの手にも追いまわされ、また後にアブシャロムによって追い出されたのです。しかし彼は、イスラエルの王となり最後まで君臨しました。それは彼が、ここで自分に言い聞かせるような格言を、自分自身が守っていったからに他なりません。

おそらくイエス様が山上の垂訓で語られた幸いは、ここの箇所から来ていると思われれます。「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ 5:5)」柔和な者と言いますと、何か優しい性格の人の印象を持ちますが、そうではありません。ここにあるように、悪があっても耐え忍び、それでも主に信頼して善を行なっていくことに裏打ちされています。私たちは、地を受け継ぎたいなら自分でそれを得ていこうとします。いいえ、主が受け継がせてくださいます。自分で獲

得するのではなく、主が授けてくださるのです。

2B なくなる敵対者 12-20

37:12 悪者は正しい者に敵対して事を図り、歯ぎしりして彼に向かう。37:13 主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。

悪者に対して、このような余裕が欲しいと思います。腹を立て、怒っておらず、主に信頼している人には、主ご自身があざ笑っておられる姿を見上げることができます。詩篇二篇で、国々が相集まって神とキリストに反抗しようとしたとき、神が天からあざ笑っておられたことを思い出してください。

37:14 悪者どもは剣を抜き、弓を張った。悩む者、貧しい者を打ち倒し、行ないの正しい者を切り殺すために。37:15 彼らの剣はおのれの心臓を貫き、彼らの弓は折られよう。

「さばいてはいけません、さばかれないためです」というイエス様の言葉があります。人に剣を抜くような人は、その剣で殺されます。同じ裁く量りで裁かれるのです。そして、悪者に対比して、「悩む者、貧しい者」とあります。彼らは、主がおられなければ私は何もできないという霊的枯渇状態にある人です。だから主のみを自分の拠り所とする人です。

37:16 ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにまさる。37:17 なぜなら、悪者の腕は折られるが、主は正しい者をささえられるからだ。

大事な格言です。私たちが持っているものは少なく見えるかもしれませんが、しかし、そのわずかに見えるものをもって、主は支えてくださいます。キリストの教会は、イエス・キリストの福音というわずかな者しか持っていません。ある人は、私たちを無知で独善的だと言うのでしょうか。もっと世の中を知らないければいけないというでしょう。それで教会が、この世の哲学や教え、またそのやり方を真似する誘惑を受けます。しかし、その福音こそが人の問題を根本的に解決する力を持っているのです。罪から救う力を持っています。したがって、わずかなのですが全てを持っています。

37:18 主は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。37:19 彼らはわざわいのときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。37:20 しかし悪者は滅びる。主の敵は牧場の青草のようだ。彼らは消えうせる。煙となって消えうせる。

「全き人」とは、主に信頼して、その信仰を全うしたということです。その人には、永遠の相続が約束されています。ガラテヤ書には、「あなたがたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。(4:7)」とあります。

3B 人に施す者 21-29

37:21 悪者は、借りるが返さない。正しい者は、情け深くて人に施す。37:22 主に祝福された者は地を受け継ごう。しかし主にのろわれた者は断ち切られる。37:23 人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。37:24 その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。37:25 私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。37:26 その人はいつも情け深く人に貸す。その子孫は祝福を得る。

21 節にあるのは、地を受け継ぐ人々は施しをする、与えることです。地を受け継ぐのですから、人間的に考えたら受けなければいけません。ある時は人から奪い取らなければいけないでしょう。ちょうど、シリアとイラクで狼藉しているイスラム国のように、です。けれども、神は与える者が地を受け継ぐこと、祝福を受けることを話しておられます。人間的には、与えてしまったら倒れるのですが、与える人は主が支えてくださるのです。私たちは貪るか、それともキリストの愛に満たされて与えるかの二つの選択があります。

37:27 悪を離れて善を行ない、いつまでも住みつくようにせよ。37:28 まことに、主は公義を愛し、ご自身の聖徒を見捨てられない。彼らは永遠に保たれるが、悪者どもの子孫は断ち切られる。37:29 正しい者は地を受け継ごう。そして、そこにいつまでも住みつこう。

いつまでも住みつくことを、ダビデは強調しています。これが信じている者とそうでない者との大きな違いです。後者は、この世にあるものだけで判断しますが、私たちはその後の世にあるものを見えています。それを神がこのように約束しておられるからです。

4B 主の道を守る者 30-40

37:30 正しい者の口は知恵を語り、その舌は公義を告げる。37:31 心に神のみおしえがあり、彼の歩みはよろけぬ。37:32 悪者は正しい者を待ち伏せ、彼を殺そうとする。37:33 主は、彼をその者の手の中に捨ておかず、彼がさばかれるとき、彼を罪に定められない。37:34 主を待ち望め。その道を守れ。そうすれば、主はあなたを高く上げて、地を受け継がせてくださる。あなたは悪者が断ち切られるのを見よう。

ここでの正しい者の特徴は、神の教えが心にあるので、知恵を語り、公義を告げているということです。神を待ち望むことは、いつも主の御言葉に触れていて、それに豊かにされているかどうかであります。その人は、罪に定められることはありません。そして、御言葉を守っているのです、主の道を守ります。

37:35 私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野性の木のようにはびこっていた。37:36 だが、彼は過ぎ去った。見よ。彼はもういない。私は彼を捜し求めたが見つからなかった。37:37 全き人

に目を留め、直ぐな人を見よ。平和の人には子孫ができる。37:38 しかし、そむく者は、相ともに滅ぼされる。悪者どもの子孫は断ち切られる。

悪がはびこっていても、自分自身はそれから離れて、全き人、直ぐな人を模範として生きていきます。そこには平和があります。他のものは過ぎ去っていきますが、自分だけは長らえます。

エペソにある教会で律法についての論争がはびこり、また政府に対して反抗的な人たちがいた中で、パウロはテモテにこのように勧めました。「そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がさげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。(1テモテ 2:1-4)」

上に立てられている人々が必ずしも良い政治をしているとは限りません。むしろ、異邦人の王は横暴です。しかし、執り成しと感謝の祈りがさげられるためには、そこに心の余裕がなければいけないのです。それがここで語られていたこと、主を信頼して、主を待つことです。そうすると、威厳をもって、平和で静かに暮らしていくことができます。ここの箇所も詩篇 37 篇とテーマが同じです。しかも、そのような平和があるからこそ、神の救いの御業も行なわれていきます。

37:39 正しい者の救いは、主から来る。苦難のときの彼らのとりでは主である。37:40 主は彼らを助け、彼らを解き放たれる。主は、悪者どもから彼らを解き放ち、彼らを救われる。彼らが主に身を避けるからだ。

最後は今、話しましたように、主が平和を与えてくださった後で、救いをも与えてくださいます。忍耐をもって善を行なっている中で、平和が拡がり、平和が拡がる中で救いも行なわれます。私たちがこの知恵にしっかりとつながってほしいですね。そうすれば、悪のはびこるこの騒々しい世の中でも、立派な証しとなることができます。